



アニュアルレポート(支部活動報告書) 中国 2008

— 発行 —
平成 21 年 11 月

— 制作 —
社団法人日本建築家協会中国支部
〒730-0013 広島市中区八丁堀 5-23 オガワビル
TEL (082) 222-8810 / FAX (082) 222-8755
URL <http://www.jia-chugk.org>

— 表紙 —
株式会社松岡製作所(交流部会)
専務取締役 松岡 剛

— 印刷 —
(有) アウルズコーポレーション

CONTENTS

■ 2008年度 中国支部事業 総括	1
支部長 村重 保則	
■ 第3回 中国支部大会	2
「JIA中国支部建築大会 IN 松江 2008」	
実行委員長 矢田 和弘	
■ JIA環境再生フォーラム in 萩	4
■ ひろしま美術館JIA25年賞記念講演会	6
JIA副会長 與謝野 久	
■ 岡山文化セミナー	9
■ おかやま建築まちあるき	
■ よみがえらせたい岡山城勉強会	
■ 第3回 福山建築文化セミナー	
■ 住まいの情報プラザ	
■ JIAプロフェッショナルスクール2009	10
■ イタリア研修旅行	11
■ JIA中国支部組織図	13
■ JIA中国支部会員リスト	

2008年度 中国支部事業 総括



社団法人日本建築家協会中国支部長 村重保則

今期は、出江会長の下、支部・地域会とも総会の早期開催という、例年より1カ月も早いスケジュールに追われ、当初よりバタバタとした状態でのスタートとなった。

本年度本部の事業計画基本方針では設計業務環境の改善に邁進すること、統括力のある設計者資格の一元化を目指し、登録建築家制度のオープン化を図ること、組織・財政の再構築と地域の自主性尊重及び活性化との3項目であったが、どの方針も一年だけで解決できるはずもなく、いまだ活動は継続中である。昨年11月28日には改正建築士法の施行によりますます建築家に対する、或いは事務所組織運営に対しても厳しい状況が押し寄せている。業務内容は増え、報酬は相変わらずの状態が続いている。

最後に会勢について。本年は正会員の逝去が続いたが、支部としての会員数は微増となった。会員数の拡大へますますの努力をしていきたい。

支部としては本部方針を受け、10項目の目標を掲げ事業の遂行に励んだ。

1. 財政改善への継続的な取り組み
事務局経費や各事業予算を、昨年以上に厳しく見直し、削減に努力した。
2. 改編組織の機能整備と充実
従来の有り様を改編し、事業担当者を決定することで責任分担の明確化がなされ、より機能的になった。
3. 市民に開かれた広報活動の実施
支部ホームページのリアルタイムでの報告や昨年同様に支部長便りとして月報を掲載した。
4. 業務環境への改善
本部より明確な方向性が示されないまま、時間だけが過ぎたように思う。年当初より確認申請時に設計契約書を添付すること等を全国的な運動として展開するという話であった。しかし、士法の改正により「重要事項の説明」等が義務付けられたものの、それに近い規則が士法に既に存在するとのことで現在調整中につき、支部としては待ちの状況にある。
5. 登録建築家資格制度のオープン化支部としての対応は
当面支部内の登録建築家を増員する努力はしているものの如実に結果が表れていない。現在本部内ではオープン化への詳細について調整中であり、2009年度内

にはオープン化が実現すると思われるがこのままでは先が危惧される。士会連合会との一本化への努力もはかどっていない。早急な実現が望まれる。

6. 再生と環境への取り組み
山口地域会で開催された「環境再生フォーラム」においてシンポジウムを開催した。新委員会として取り組みに困惑した感はあるが、今後も継続されるであろう「環境再生フォーラム」との共催により委員会の活動が広がれば幸いである。
7. 「第3回JIA中国支部建築家大会 2008」の実施
昨年の11月28、29日に島根県松江市の島根県立産業交流館にて開催した。年々会員の参加も活発となり、今回は「中国地方の未来に向けての建築家の発展と活動」をサブタイトルとして実施した。2日間にわたり、大変盛況であった。来年度の開催地は山口県となった。
8. 建築家養成講座
本年は本部主催の「プロフェッショナル・スクール」と共催し、2月22日広島市での開催を実施した。「厳しい環境を乗り越えるために」と題し、事務所の経営戦略やクライアントの開拓、建築手法についての集中講義があった。できれば来年も開催したい。
9. (仮称) JIA中国支部建築賞、顕彰制度の創設
本年度は審査員のスケジュールなどの関係で実施できなかったが2009年度開催へ向けて準備を進めている。正式には「第1回 JIA中国建築大賞」とし、一般と住宅の二部門を設け、2009年5月頃から募集開始、11月結果発表、翌年総会の場で表彰式ということが決定した。
10. 「UIA大会2011 TOKYO」への働きかけとしてUIAトリノ大会へのツアー実施
6月27日より7月6日まで16名の参加を得て初めての支部ツアーを実施した。トリノでのUIA大会参加後、イタリアを北から南へ縦断するツアーを催行し、素晴らしい視察旅行となった。これを契機に東京大会へ弾みがつけばよいと思う。

第3回 J I A中国支部建築家大会 松江2008

中国支部大会 実行委員長 矢田和弘

J I A中国支部の2008年度事業の一環として昨年の岡山に続き今回は山陰の松江で開催された。耐震偽装事件以来、建築士法の改正など建築家の社会に対する責任がより重くなって来ている昨今、建築家が未来に向けて発展していく為にはどうしたらよいか、会員相互の情報交換と研鑽を積み場として開催された。

① 基調講演 (12/28)

テーマ：「災害復興に文化・美を」

講師：J I A会長 出江 寛氏

阪神大震災の時にける建築の復興のあり方を取り上げ真の文化とは何かについて武野紹鵬の言葉を取上ながら話された。

② 2008年住まいのクリニックセミナー (12/28)

モデレーター：今川憲英氏 (東京電機大学教授)

出江 寛氏 (J I A会長)

村上典史子氏 (映画プロデューサー)

今川先生が実際に構造設計や耐震設計をされた建築を紹介しながらディスカッションが進められた。

③ デザインフォーラム (12/29)

コメンテーター：出江 寛会長

村重保則支部長

杵村優一郎鳥取地域会長

龜谷 清島根地域会長

プレゼンテーター：原 浩二会員 (島根)

来間直樹会員 (鳥取)

二人のプレゼンテーターの作品を題材に色々な建築に対する考え方が夫々に述べられた。

④ エクスカーション (12/29)

松江城周辺散策と堀川遊覧が予定されていたが山陰特有の初冬の不安定な天気によって堀川通覧は取止めとなった。

■事業の概要

対象：J I A中国支部会員、会員スタッフ、
交流部会、島根・鳥取建築関係者、一般

会場：島根県立産業交流館 (くにびきメッセ)

日程：2008年11月28日 (金)

2008年11月29日 (土)

後援：(社) 島根県建築士会

(社) 鳥取県建築士会

(社) 島根県建築士事務所協会

(社) 鳥取県建築士事務所協会

(社) 日本建築構造技術者協会中国支部島根地区

(社) 日本建築積算協会中国四国支部

<第1日目>

■大会開会式 (28日 13:00~)

村重支部長の開会挨拶



■基調講演 (28日 13:30~14:30)

J I A会長 出江 寛氏氏による基調講演。

演題は「災害復興に文化・美を」



<第2日目>

■ 2008年住まいのクリニックセミナー

(28日 14:45~17:45)

モデレーター：今川憲英氏



■ デザインフォーラム (29日 9:00~11:00)

恒例になったデザインフォーラム

プレゼンテーター：原 浩二会員 (島根)

来間直樹会員 (鳥取)



■夜楽 (懇親会) (28日 18:00~20:00)



J I A環境再生フォーラム in 萩

中国支部山口地域会では、2001年の下関市に始まり、昨年の防府市まで、年に1度県内各地を巡回して、その地域のテーマにもとづき、タウンミーティングを開催してきた。2008年度は中国支部に「再生・環境対応委員会」が立ち上がったのに呼応し、本年3月に「J I A環境再生フォーラム in 萩」を歴史の町萩市で開催した。

萩市は山口県の北西部に位置し、日本海と中国山地に囲まれ、阿武川の下流に形成された三角州を中心に発展した町である。都市としての起源は、関が原の合戦に敗れた毛利輝元が慶長9年（1604年）に萩の地に築城開府したことからはまる。又新幹線や高速道路を降りてから、1時間あまりを要する、陸の孤島の様な不便なところでもある。しかしながらその様な「地」だからこそ、関が原の戦いに敗れた毛利氏が、徳川家の許しを得て萩に城を築く事ができ、又明治維新の際、藩主や重鎮がそろって東京や山口へ出て行った後、現在でも江戸時代の町割・道筋が8割以上も残る全国でも希有な「歴史の町」となり得た。そして城郭周辺と城下町の中心部が国指定史跡、武家町2ヶ所と港町1ヶ所が国選定の重要伝統的建造物群保存地区であり、江戸時代の地図がそのまま使える歴史観光の町である。地勢的にも一次産業と観光に依存している萩市は、経済基盤も弱く、景観保存・景観誘導等積極的な景観施策はやはり行政主導で行なわれて来た。

一方で、平成16年11月に萩市の歴史文化の拠点施設である萩博物館が竣工し、萩の文化遺産を再発見し、それらの散在するまちじゅうを、屋根のない博物館とみなし、市民・事業者・行政の連携協働による新たなまちづくりの展開を目指す萩まちじゅう博物館構想がスタートした。萩まちじゅう博物館推進の中核をなすのはNPO萩まちじゅう博物館であり、中核施設である萩博物館の運営から萩の文化遺産を再発見し、磨きをかける様々な活動を展開し、その活動の輪は年々大きくなり、観光ガイドを行なっているNPO萩観光ボランティア協会やそれぞれの地域で活動するまちづくり団体とも連携し、萩のまちづくりの大きな動きになりつつある。

また、民間事業者の動きも活発化し、平成19年4月（お成り道）ができ、10月には「NPOお成り道ねっと」が立ち上がる。お成り道は毛利の殿様が参勤交代に使っていた重要な幹線である。この歴史的由緒あるルートは、昭和時代は萩市の中心商店街として、大変賑わっていたところである。現在空き店舗・空き家が急激に増え、通りは完全に様変わりした。このお成り道を歴史ある通りに再生しながら、中心商

店街の活性化を図り、新たな萩観光のストリートとなるべく活動も始まった。・・・

こうした行政、NPO、民間事業者の取組みが功を奏してか、平成19年度には年々減り続けていた観光客が初めて7%増加している。・・・

フォーラムでは、キーマンの方々、行政より大槻洋二氏（萩まちなみ対策課主任専門職）、NPO萩まちじゅう博物館長の高木正熙氏、民間より清水明人氏（株式会社お成り道取締役・NPO法人お成り道ネット専務理事）にそれぞれ思いを語っていただいた後、J I A中国支部再生・環境対応委員会佐藤正平委員長がコーディネーターをされ、パネラーとして3人の各講師に山口地域会より三村が加わり、会場の方々と共に、環境再生とまちづくりについて、活発な意見交換を行なった。



萩の町並み保存のセカンドステージへ

大槻 洋二

はじめに

歴史の町として全国に名前が知られるようになった萩市において、この恩恵を受ける我々には、これを食いつぶすような短絡的なまちづくりではなく、少なくとも今後100年を見据えた取組みが必要となる。同時に県庁所在地でもなければ、大きな工場もない人口5万数千人の小都市において、現在、そして将来に亘ってこの町が生き続けていくためのまちづくりとして、正面から取り組まなければならない課題である。

1 萩の町並み保存のこれまで

萩市で町並み保存に取り組んできたのは、皮肉にも萩が歴史の町として観光客にあふれた昭和40年代中ごろのことである。歴史観光でにわかに関わったことにより、その財産であるはずの町並みが急激に失われるという状況が生まれた。しかしながら、高度経済成長期であった当時において、町並み保存という考え方は認識されておらず、行政として取り組む手だても無かった。

そうした中、萩市では、「萩市歴史的景観保存条例」を制定し、独自の町並み保存行政をスタートさせた。この前後には、倉敷市や金沢市、高山市でも同様に、市独自条例による町並み保存が始まり、これらの動きを受けるように昭和50年の文化財保護法の改正により、伝統的建造物群とその周辺環境を一体的に保存することを目的とした伝統的建造物群保存地区（伝建地区）制度が創設された。この制度で最初に選定された7地区に萩市の堀内、平安古が入り、新たな町並み保存がスタートした。

その後も、平成2年には都市計画区域内でのトータルな景観形成と保全を目的とした都市景観条例の制定、平成13年には港町の町並みが残る浜崎地区の伝建地区選定、平成17年には景観法に基づく景観条例の制定と市内全域を対象とした景観計画の策定など町並み保存から景観保全に至る取り組みが展開されてきた。

2 町並み保存行政の限界

このように全国的にも先進的な町並み保存行政に取り組み、一定の成果をあげてきた現在、担当者として課題も見えてきた。萩市には、伝建地区以外の旧城下町の範囲にも、城下町時代の町割りとともに、相当数の伝統的な建造物が残されている。これらが面として残されていることが、近年、高く評価されている。しかしながら、これらは全てを文化財として保存していくことは、その絶対数からして現実的に不可能であるし、その多くは中心市街地に位置し、現在も住居や店舗として利用されている。

一方、新たに建つ建造物の町並みへの調和をはかるための景観条例などの取り組みも、色彩など一般化された無難な基準への適合を求めるに止まり、町並みの魅力を高めることにはなかなか寄与していないのが現実である。

3 町並み保存の展開（建築家へ）

今回のフォーラムでは、歴史環境の再生において、このような町

並み保存行政の限界を乗り越えるには、地域の建築家のとの連携が必要であることを、浜崎伝建地区で進めている町家の保存修理において、建築家が果たしている役割について報告した。

具体的には、地域の建築家が持つ地域の建築に対する知識やそれを建築デザインとしてまとめ上げる力が、文化財の保存修理の設計監理のみならず、地域の歴史環境の質を高めることに繋がりはじめていることを「地場産業の担い手、地域のまちづくりの貢献者、地域生活のコーディネーター」という点から紹介した。現在、三村氏ら地域の建築家とともに「萩つくる会」というグループをつくって、ようやくその途についたところである。

4 町並み保存の展開（市民へ）

一方、町並み保存の主役は、行政でも建築家でもなく、地域の市民であり、日々の生活や生業の中でどのような関わり持つかが鍵になる。萩市では、豊かな文化遺産に恵まれた市内全域を屋根のない博物館に見立て、そこに住む市民が主役となって、まちづくりを進める「萩まちじゅう博物館構想」が掲げられている。

この活動の中心となるのが、ボランティア意識の高い市民が参集して結成されたNPO法人萩まちじゅう博物館である。今回のフォーラムでは、この館長（代表）である高木氏より、このNPOが萩博物館を中心に展開する様々な活動やその目指すところについて報告があった。そして、この活動が成功している背景には、その歴史的背景から生まれた萩市民の郷土への強い思いがあり、壮大な実験として継続中であるとの話があった。

5 町並み保存のセカンドステージへ

こうして見たとき、萩の町並み保存は新たな段階に差し掛かりつつあるように思う。それは、これまでの狭義の文化財保存として、建造物をハードとして保存するだけでなく、そもそもこの建造物を生み出し、受け継いできた生活や生業の中で保全することが求められつつあり、歴史都市である萩市では、この町が生き続けていくためのまちづくりとして取り組むことでもある。それは、文化遺産に関わる観光政策、空き家対策を含む住宅政策、地場産品・技術に関わる産業政策、この町で生きる意義を感じる生涯学習や学校教育にも及ぶのかも知れない。

その流れを後押しするように、今年の2月に萩市は国土交通省、文部科学省（文化庁）、農林水産省が連携して制定などした「歴史まちづくり法」に基づく歴史風致維持向上計画の最初の5都市のひとつとして認定を受けた。

いずれにしても、萩市の町並み保存は新たなステージに入りつつある。町並み保存の担当者として取り組むべきは、その基盤であるハードの保存を、都市計画などとも連動してより普遍的なものにするとともに、町並み保存をめぐる建築家と市民の「交流」の場づくりと仕組みづくりによるソフトの町並み保存を、車の両輪のごとく展開することにあると考える。

ひろしま美術館 J I A 2 5 年賞記念講演会

9月26日(金)ひろしま美術館にて記念講演会とパネルディスカッションを開催した。パネルディスカッションでは設計者(J I A 與謝野副会長)、運営者、施工者(維持管理者)、地元の J I A 会員、美術館が建設された当時生まれたばかりの地元の建築家たちが美術館の歴史を振り返った。

J I A 25 年賞受賞記念講演

「ひろしま美術館のこころとかたち

……愛とやすらぎのために」

創設者の想い

ひろしま美術館が創設されて今年で早や30年になります。この美術館創設から設計そして工事、さらには維持運営にわたるこれまでの軌跡には、誠に大勢の人々の数多の想いがさまざまな結晶化したかたちとして満ちみちています。設計を依頼された当初に、創設者であり初代館長であられた井藤勲雄広島銀行頭取(当時)が長年温めて来られ吐露された次のことばには熱い情念が凝縮していました。「一瞬にして廃墟と化したその焼け野原に、次の年、鮮やかな赤い百日紅が咲いたのです。今、ここに必要なのはこの鮮やかな色合いがもたらすやすらぎではないか。殺伐とした地域に潤いをそして人々のこころに癒しをもたらし、地域の復興と人類の平和を願う、愛とやすらぎのための美の殿堂を地域の人々とともに築いていきたい。」との趣旨のことばでした。

この美術館草創の趣旨は、このようにまことに率直で力強く心温まる想念に満ちていました。その想いは戦後すぐに、市民に親しまれやすい西欧の「印象派」の絵画をひとつひとつ買い揃えられる地道な事業として展開されていき、やがてこれらの収蔵と展示のための美術館の建設が現実のものとなりました。

設計当初での創設者の想いの吐露はさらに続きます。「美術館の建物は光に満ちたドームとしたい。その廻りには水のせせらぎを配したい。そして魂を鎮める静かな佇まいであってほしい」と。このように、この美術館は鎮魂と平和への祈り、そして美術とのふれあいを通じての身近な永遠のやすらぎの場として構想されたのです。

2つの大きなテーマと原イメージ

この構想は、地元の財界・行政・文化人の幅広い支援を受けて、まさに地域社会の人々総出で地域復興への熱い想いを繋ぎとめる大きな人の輪として結晶化していき、長年、この地域にお世話になっている私たち設計事務所との緊



密な協働作業を経て、美術館構想が練られていきました。この構想を具体化していく中で「愛とやすらぎ」のために鎮魂と平和を象徴する場とすることを念頭において、設計テーマを大きく2つに絞り込んだ経緯があります。

一つは平和への祈りと芸術とのふれあいの場を「やさしく、明るく、印象深く、力強く」提供すること。今ひとつは「時とともに表情豊かになる、時を設計する」ということでした。さらに30年を経た今、今後のテーマを考える時ですがこれは末尾に記しておきます。

私がこの美術館の設計を担当したのは30歳前後の頃です。先輩であられた寺本敏則さんの指導を受けつつ、このプロジェクトの設計から竣工までの間で学び取った教訓の一つに「デザインのアリガタリティのシーズは必ずその地域の計画地のコンテクストにある」ということでした。その教訓が示唆する意味には、30年を経た今日でも襟を正される深遠な開明さを感じています。

創設者が目の前で吐露された「百日紅の鮮やかな色の記憶」「鎮魂の深い想念」「ドーム」「水にかけの思い」「色を鮮やかに照らし出す光」「円形平面の象徴性」「静かな中庭」「印象派絵画のテーマ」等々、これらはその地域独特の空間を創生させる上での創設者の原イメージであるとともに、私たち設計者が望ましい美術鑑賞の空間イメージを模索し「無から有を生み出していく」上での、いのちの息吹をともなった貴重なシーズでもありました。このシーズを胸の内に温めつつ空間を具体化していく過程で、若気の腕力を発揮して数多のイメージを提示し一つの空間にまとめて挙げていった作業を経て感じたことは、そのシーズの連鎖が、最終的な「かたちにいのち」を吹き込んだことでした。

依頼者の思いを徹底的に聴き込むこと、地域のコンテクストを徹底的に読みこむことの大切さをこの時、脳みその筋肉に刻み込んだ記憶があります。

「時を設計する」ということ

建築の堅牢性と長寿命化もこの設計の際の重要な課題でありました。一方、絵画を鑑賞する人間側には、その当座の心理・感情・人生観などによって、見つめる絵画への印象にも移ろいが付きもの、ということがよく言われ、私自身にもそうした感慨がありました。ここで気づいたのが、この美術とのふれあいの空間にも、自然と人間、自然と建築とのいとなみに通底する「時間の推移の概念」が息づいているのが好ましく、こうしたいとなみを使用する素材と空間の組み立てとにより素直に表現する仕組みが「時とともにこころに語りかけ続ける空間」となることではないか、という発想でした。美術館を訪れる度に、変わらぬものと変わるものとが、それぞれ語りかけるように出迎えてくれる、その対話性、これも大切であると。

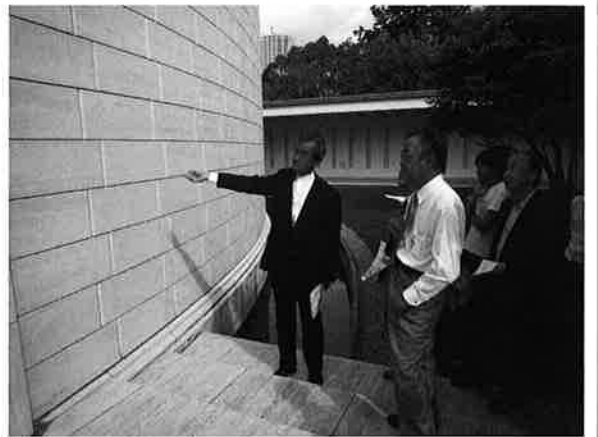
この推敲が大胆にも「時を設計する」と言う表現の仕組みに発展していき、単純平面の柔軟な対応性をはじめ、機能的タフさの面での100年建築、素材では屋根の緑青銅版の採用、本館外装の大理石の白亜化と防汚ディテール、回廊外壁の凹凸仕上げ形状などにも具体化されて行き、植栽面では周囲の公園の密実な緑化と成長軌跡の豊かな中庭の紅葉採用、設備面では磨耗と腐食を極小化した比較的シンプルな全電気システム(空気熱源ヒートポンプ方式他)の採用、経年退色を伴わない無紫外線照明装置等々、この美術館建築の建造物としての基本性能の設定において、時間経緯概念を通例よりも強く組み入れたわけです。30年を経て、回廊の外壁は苔むしていき老齢化表情がすすむ一方、本館の外壁大理石の表面は目地汚濁なく結晶化して白亜化していき、屋根の銅版も下地の胴の経年腐食で鮮やかな緑色の表情に転換していきさらに進んでいます。

本館の白亜化による象徴性は今後おだやかに増していくものと見られます。また、システムの単純堅牢性は、健全なメンテに支えられた息長い稼働性を提供していくものとも見られます。

「時を設計する」というテーマ表現は大それた内容と一見みなされがちですが、顧客との長年のお付き合いの中で設計監理で納めた建築を、「ひと・もの・情報」とともに組織的に継承していく設計事務所特有の企業文化に根ざす概念でもありましたので、率直な発想でもありました。

これからのテーマ：広島から世界へ

本論に戻して、この美術館を訪れる人たちのこころのいとなみに対して、時とともに変移していく側面もある空間を設えることで応えていき、そうした「こころに語りかける空間」が、美術とのふれあいの場を支える働きをもたらし続けてくれればと、30年を経た今、そっと念じているところです。余計な解説をしたようですが、あくまで「そっと」です。



この美術館の設計から建設、そして維持運営全てを通して、この施設が地域の大勢の人たちに親しまれて来た軌跡を振り返ると、展示室照明装置の製作、コンクリート打設をはじめ展示室の湿式壁等の構築、展示室内の安楽椅子の製作等にかけた当時の「職人魂」がそこに脈々と息づいていることが感じ取られ、本当に関係者が皆、あのテーマ(愛とやすらぎのために)のもとに魂を燃焼させたその熱さが今でも感じ取ることが出来ます。あわせて、水のせせらぎや植栽剪定等の維持管理、展示品の保全と展示方法への心配り、展示案内ボスター一つへの気配りなどなど、ここに集われる大勢の方々がこの施設を愛されて来た汗の跡を拝察すると、共感できるテーマがあつてこそ「かたちあるものも永らえられる」ことを身を持って示された創設者の井藤勲雄氏の慧眼には素晴らしい深さがあるものと深い敬意を表さずにはいられません。30年という時間は一つの世代交代の節目のサイクルでもあります。「愛とやすらぎのために」という熱い「ものがたり」がこの美術館創設・設計・建設・運営維持に携わられて来られた数多の方々による「ものづくり」「ことづくり」の魂を燃焼させたわけですが、その温度はまだまだ息づいています。

結びとして、記しておきたいことは、この率直かつ力強い「ものがたり」を価値ある「ものとこと」に時間をかけて丁寧かつ広汎に組み上げ、温かく育てて来られたという、この「まちと地域」が手にされた「知恵と技術」は、世界に充分に誇ることの出来る、今も貴重な生命力を湛えているということです。さらに言えば、私たち日本人はこの国が長年育ててきたこの丁寧な知的財産と技術文化とを、世界の平和と人類の友愛のために、世界に活用させる時代に立っていることを深く認識すると良いでしょう。広島発のさらなる「ものがたり」が、次の世代の若手の皆さんの瑞々しい感覚によって、新たないのちの息吹とともに発露されることを期待しております。あわせて、ひろしま美術館の今後のさらなる発展を祈念して止みません。

株式会社日建設計総合研究所
代表取締役 與謝野 久

「愛と平和」、そして「情報」を発信する美術館へ

ひろしま美術館 事務局長 野上勝正
設立の趣旨として、原爆で何もかもなくなった中で、戦後、広島が世界平和文化都市として再建していく中で、地域と共に歩んできた広島銀行 100 周年の記念事業として建設されました。

現在、11 月発行に向けて、ひろしま美術館の 30 年史を編纂しております。

美術館の完成は、私が入行して数年が経った頃で、井藤頭取は雲の上の人だったのですが、頭取によれば、「廃墟と化した焼け野原を見て、広島に必要なのは「潤いと癒し」であり、その後、構想 10 数年をかけ、「愛とやすらぎのための美術館」であるひろしま美術館建設が始まりました。本館は原爆ドームに見立て、水を求める人々のために、周りに水のせせらぎを配しています。

常設展示室は円形で、4 つの展示室で構成され、世界から 1 点 1 点思いを込めて収集された名画、ミレーの「刈り入れ」やモネの「セーヌ川の朝」、ゴッホの「ドービニーの庭」、その他、ロートレック、ピカソ、ユトリロ、シャガール、レオナールフジタなど、見たい絵にいつでも出迎え、ゆったりと鑑賞できる居心地の良い空間構成になっています。

現在、入館者数も 450 万人を超え、年間 15 万人以上の方が来館していただいております、たくさんの地元の方にも観ていただいております。

「美術館などの文化的な事業が経済を牽引していくようにならなければいけない」と館長が提唱している中で、小中学生は無料（送迎付）、キャンパスメンバーズ制度という大学との契約で学生の無料化など、新しい取り組みも始めています。

愛と平和を世界に発信すると共に、見てもらう美術館から、「情報を発信する美術館へ」と、取り組んでいきたいと思ひます。



私にとってのひろしま美術館（竣工後の世代の思い）

永い年月の間にたくさんの人がこの美術館を訪れ、それが心の中に浸透していく。継続していくということは大変で、その先にカルチャーが生まれる。その事に建築が関与し目の前にある事はすばらしいことである。

（谷尻誠氏）

私にとって知っているけど入りづらい存在で広島に居ながら今までにこの場所に来るチャンスがなかった事は残念だ。市民に愛される美術館でいつまでも続いてほしい。

（小川文象氏）

近所に住んでいたので何度もこの美術館に家族で訪れた。また小学校の遠足で歩いて来た。なじみのある見方で建物を見ている。絵も昔、そんなの見たことあるという感じである。25 年経った現在、美術館が年を経るように人間も成長するごとに見方が変わってくる話には感銘した。小学生の頃、ひろしま美術館を訪れたとき警備員の人にこの美術館に使われている大理石の話聞いた事がある。当時の警備員の方にも美術館への思いが伝承されていたのだなと思ひ返した。

（大学院生 25 才）

岡山文化セミナー

県内で様々なジャンルでものづくり等活躍されている方を招いての文化セミナーを開催し、私達の今後の建築との協働につながる良い関係作りを目指している。

現在 10 回目、回を重ねる事で地域に文化を根ざし広めてゆく活動となっている。

おかやま建築まち歩き

岡山市内カルチャーゾーン内の建築物を J I A 会員の案内で参加者と一緒に見学した。

色々な人・まちとの触れ合いが楽しいまち歩きであった。
（一般参加 70 名）



よみがえらせた岡山城勉強会

歴史的まちの遺産を後世にしっかりと伝えてゆきたいと、まちのシンボルである岡山城の復元を目指したいと勉強会を行なって気運の盛り上げを図っている



建築講演会

地方都市（岡山）で建築の勉強をしている学生にとって、中央で活躍している建築家の話を聞く機会が少ないということで、地域会では毎年 1 回は J I A 会員の中から講師を招いて建築講演会を実施している。今年は藤本壮介氏にお願いした。

（参加 300 名）

第 3 回福山建築文化セミナー

11 月 15 日（土）に福山市のまなびの館ローズコムにおいてセミナーを開催した。

この企画は、広島県の東に位置する小さな地方都市福山が魅力的な街になるきっかけにならないかと地元の会員とその仲間たちで継続させている事業である。

今年は、建築家長谷川豪氏を講師に招き「自作について」の演題で講演して頂いた。会場には幅広い年代から 200 人近くの見客が詰めかけた。



住まいの情報プラザ

広島県主催のひろしま住生活月間の一環として 10 月 25 日（土）26 日（日）の両日、広島県・広島市・中国地方整備局・建築関連団体によるイベント「住まいの情報プラザ」に参加した。今年は「安心でエコロジーな住まい術」をテーマに、住宅のエコや地震対策など身近にできる事を相談会やセミナーなどを通じて情報提供した。

J I A プロフェッショナルスクール 2009

厳しい環境を乗り越えるために

2月22日(日) J I A プロフェッショナルスクール 2009

(自立のための建築家実務講座)が広島で開催された。

3部構成になっており、以下の順序で進められた。

① 日建設計の戦略：良い建築を創り続けるために

西村 浩氏 (日建設計)

- ・ 今まで日建設計が目指してきたこと
- ・ これから数年で日建設計が目指したいこと



(西村 浩氏)

② 私の建築手法

小川広次氏 (建築家)

- ・ 2006年度 J I A 新人賞受賞作である「阿佐谷南の家」を例にデザイン手法を解説された。



(小川広次氏)

③ プロフェッショナルのクライアント開拓

横山禎徳氏 (社会システムデザイナー)

- ・ クライアントと出会う
- ・ クライアントと付き合う
- ・ 将来のクライアントを見つける



(横山禎徳氏)

イタリア研修旅行

トリノ旅行総括

村重 保則

「2011 UIA 東京大会」へ向け協力活動の一環として、「2008 UIA トリノ大会」へのツアーを実施することができました。中国支部独自のツアー計画を提案したときには遠い先のことと思っていましたが、矢田副支部長をはじめ、皆さんの協力を得て無事実行できたことが何より喜ばしいことです。ツアーへの参加は15名、旅行中様々なことがありましたが、大変賑やかで楽しく愉快な旅となり、また研修(建築に対する)としても大変有意義なものであったと思います。事故もなく安全無事に成就できたことを感謝いたします。倉森先生をはじめ藤井前幹事長、久保井常任幹事、矢田副支部長の4組のご夫妻、鳥取よりご参加の田中先生、井手添先生、また交流部会より大光電気の金田女史、日立ビルシステムの山下さん、ご無理をお願いし参加していただきましてありがとうございました。最後に常任副幹事の高志さん、いつも同部屋で大変苦痛だったことですが、よく我慢してくれました。ありがとう。そして事務局の藤恵さん、ご参加大変心強く、楽しいものとなりました。ありがとうございました。

ご参加の皆様方に再度感謝感謝。

UIA トリノ大会へのツアーは最高でした！今後又このような企画を立案実行したいと思いますのでどうぞ皆様方のご参加をお願いします。

イタリア視察研修の旅

矢田 和弘

去る6月28日～7月6日まで、UIAトリノ大会参加にあわせ久々にイタリア各地を、J I A中国支部の方々と廻りました。ミラノではレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を、倉森さんの解説を聞きこの壁画を中心に、この室内空間が大変巧妙にできていることが分かりました。

フィレンツェの街を一望できる小高い丘の上のミケランジェロ広場から望む夕方のフィレンツェの街は、アルノ川に架かるヴェッキオ橋の美しいシルエットがまことに幻想的で、若い時にトスカーナ地方を一人廻っていた時の情景を思い起こしました。

「よど号事件」の時、太田邦夫さんの引率で新居千秋さんなどと一緒に、約5週間ヨーロッパ8カ国を廻りましたが、期間中ホテル同室だった山口さん(現東海大教授)と、シエナのカンポ広場の美しさに魅せられ、夜遅くまで語りあいましたが、以来カンポ広場は4度目でした。何と今回は「パリオ」の当日で、祭りの準備は完了し本番前のあの有名なパレード・競馬のムードが広場周辺に漂っていました。

初めてヨーロッパに行った翌年に、5週間ローマ大学近くの家庭にホームステイしている時、それとは知らずスペイン大使館(ボルゲーゼ宮殿の一部をスペインが借用)に入り、そこでまたま居合わせた高名な日本人画家の案内で、更に奥にある見事なロビーに掛かる「支倉常長」の肖像画を幸運にも観ることができました。さすがに今回は気がひけ、前を通りがかるだけでした。

また、当時ローマのパンティオンでは、この空間を絶対に忘れまいと、朝夕計30回位通い、ジ〜とその場に身を置き、身体中にその感動を染みこませようと、唯ひたすら長い時間天井を仰ぎみていたことを昨日のように思い出しました。時間の都合で当時のホームステイ先メリーさん宅を訪ねなかったのは今でも心残りです。

トリノ大会ではJ I Amagazine「建築家」にも載っていたように、多少トラブルはありましたが、なぜかイタリア人は憎めません。他のヨーロッパ各国、アメリカや中国、それぞれ良き思い出はありますが、やはり私はイタリアが一番好きです。



旅のおもいで

倉森 治

UIA大会開会レセプションの会場、ヴァナリーア王宮に到着直前、突然の大雷と雹と豪雨。やっと上がった雨の後の王宮中庭は、すべての準備が水に流された感じ。ヨーロッパのパーティは食べるものもなく、手持ちぶさたで、スパークリングワインをがぶ飲み、これがこの旅の始まり一番の印象です。

ミラノ、トリノ、ジェノバ、ピサ、フィレンツェ、サン・ジミニアーノ、シエナ、ローマと名所廻りは、再見三見でもそれぞれ味わい深いものでした。ツアーのお仕着せであっても本場のイタめしと、グループで飲むワインの味は格別でした。

ツアーの終わりにから私と妻は同行の皆さんと別れ、これを見ずして死ねないと、かねてより気懸かりのロンシャンを訪うためパリへ。TGVでベルフォーレへ、そこからタクシーでスイス国境に近いフランス東郊の山に、暑かったイタリアと比べ山の上は爽やかな風が吹き「ノートルダム・デュ・オ」巡礼教会は大きな庇を拡げて、東方の異教徒を気持ちよく迎えてくれました。

UIAトリノ視察旅行記

大光電機株式会社 金田 貴子

イタリアの照明事情！？
私のイタリアの照明のイメージは白熱灯。
しかしやはりヨーロッパはエコ先進国、一般家庭は分かりませんが、ホテルや公共施設では蛍光灯やLEDが結構使われていました。

ホテルの布セードやガラスのスタンドやブラケットをめぐってみればかなりの確率で電球型蛍光灯が使用されていて、シャンデリア等、見える所は白熱灯と使い分けされていました。

ただ、あるレストランで見える所の蛍光灯が、いろいろな色と形状の蛍光灯が混在して残念な所もありました。これからもっと増えてくる蛍光灯の使い方によってはイタリアの美しい街並みが壊れなければいいなあなんて心配してしまいます。(たまたまだったら良いのですが・・・)

しかしやはりデザインの国イタリアです。ガラスのダウンライトや、街のシンボル旗とお揃いの街灯もあったり発見もいろいろ。

仕事柄どうしても上を見てしまう旅でした。

再び訪れること

高志 俊明

学生時代に3ヶ月間、一人でバックパックを背負いヨーロッパを1周してから、10数年ぶりの海外。学生時代にはイタリアにて2週間程度過ごしいろいろな体験をしました。

今回の旅行時では、2度目の場所も何箇所もあり、再び訪ねることができました。

前回と今回で、10数年の年月が経っているものの、建築物自体、空間自体は、ほとんど何も変わっていないはずなのに、自分自身が変わったのか・・・感じ方がまったく違って、自分でも驚きました。やはり、それぞれの年齢、それぞれの季節にて感じ方も違うのだと・・・

同じ建築物、同じ空間を訪れてもその時々で違った印象を受けることができる。それが、本当のすばらしさなのかなと・・・

ひとつの空間に複数の意味を持たすことの大切さを改めて実感することができました。

今後も、機会があるたびに、年齢や季節の違う感覚で訪れてみたいと思います。



2008・2009年度 財日本建築家協会中国支部 委員会組織一覧

執行部役員	支 部 長		幹 事	副 幹 事		
	前 任	現 任		前 任	現 任	
総務担当副支部長(矢田)	・総務・広報委員会	委員長 堀 敏明 (山口) 副委員長 大石 雅弘 (広島)	幹 事	田中 輝幸 (山口) 堀 敏明 (広島)	田中 輝幸 (山口) 堀 敏明 (広島)	
	・建築家賃借制度委員会	委員長 黒川 隆久 (岡山) 副委員長 上定 正張 (鳥根)		黒川 隆久 (岡山) 上定 正張 (鳥根)	黒川 隆久 (岡山) 上定 正張 (鳥根)	
	・建築相談委員会	委員長 佐々木 著 (岡山) 副委員長 栗林 隆 (鳥根)		栗林 隆 (岡山) 佐々木 著 (鳥根)	栗林 隆 (岡山) 佐々木 著 (鳥根)	
	・地域会			三村 夏彦 (山口) 仲子 盛進 (広島) 藤田 佳篤 (岡山) 龜谷 清 (鳥根) 杵村優一郎 (鳥根)	三村 夏彦 (山口) 仲子 盛進 (広島) 藤田 佳篤 (岡山) 龜谷 清 (鳥根) 杵村優一郎 (鳥根)	
	・交際部会	吉野 康夫 (広島)		吉野康夫、山本英樹、喜田敏彦、高月輝彦、竹本雄雄、仁木満雄、高木大和、真森重雄、高木大和、田邊 正、高木大和、田邊 正、山下忠明、後藤逸文、金田貴子	吉野康夫、山本英樹、喜田敏彦、高月輝彦、竹本雄雄、仁木満雄、高木大和、真森重雄、高木大和、田邊 正、高木大和、田邊 正、山下忠明、後藤逸文、金田貴子	
	・事業・教育委員会	委員長 宇川 民夫 (岡山) 副委員長 久保 紳哉 (岡山)		久保 紳哉 (岡山) 上定 正張 (幹事) 宇川 民夫 (岡山) 山根 秀明 (鳥根) 井手添 正 (鳥根)	久保 紳哉 (岡山) 上定 正張 (幹事) 宇川 民夫 (岡山) 山根 秀明 (鳥根) 井手添 正 (鳥根)	
	・設計業務環境改善委員会	委員長 田中 輝幸 (岡山) 副委員長 尾川 隆彦 (鳥根)		田中 輝幸 (幹事) 平田 欽也 (岡山) 高田 一 (幹事) / 赤木 定 (鳥根) 尾川 隆彦 (幹事) 星立 卓平 (鳥根)	田中 輝幸 (幹事) 平田 欽也 (岡山) 高田 一 (幹事) / 赤木 定 (鳥根) 尾川 隆彦 (幹事) 星立 卓平 (鳥根)	
	・再生・環境対応委員会	委員長 佐藤 正平 (岡山) 副委員長 緑見 恵 (鳥根)		田尾 繁 (山口) 初見 恵 (広島) 佐藤 正平/武田 賢治 (岡山) 増野 元泰 (鳥根) 山下 卓治 (鳥根)	田尾 繁 (山口) 初見 恵 (広島) 佐藤 正平/武田 賢治 (岡山) 増野 元泰 (鳥根) 山下 卓治 (鳥根)	
	・IT担当			三村 夏彦 (山口) 仲子 盛進 (広島) 藤田 佳篤 (岡山) 龜谷 清 (鳥根) 杵村優一郎 (鳥根)	三村 夏彦 (山口) 仲子 盛進 (広島) 藤田 佳篤 (岡山) 龜谷 清 (鳥根) 杵村優一郎 (鳥根)	
	・融資・進捗管理委員会 (非常設)	櫻石 友秋 (鳥根)				
支部長	・支部基本政策委員会	村重 保則 (山口)				

中国支部会員（平成21年9月現在）

<岡山>

赤木定、赤澤輝彦、石原節夫、上田恭嗣、宇川民夫、大石雅弘、大倉修典、大角雄三、大丸松治、神家昭雄、神田二郎、岸本泰三、貴田茂、木村旭、倉森治、黒川隆久、佐藤正平、佐野宜夫、柴田晴夫、芝村満男、塩飽繁樹、新谷雅之、菅野憲、高田一、武田賢治、中桐慎治、中田利幸、橋村徹、丹羽雅人、則武克也、花田則之、藤澤敏典、藤田佳篤、松本正富、丸川真太郎、三宅和彦、宮崎勝秀、森原通仁、柳勝巳、山田孝延、山田暁、山名千代、湯浅康生、吉井深、渡辺俊雄、和田洋子

<広島>

石田平二、今川忠男、岩本秀三、上定正張、宇佐美紀、遠藤吉生、大江弘康、大旗健、岡河貢、小川晋一、沖本初、奥迫眞一、奥田實、梶本正博、河口佳介、神田智司、北川昭夫、久保井邦宏、後藤亜貴、坂本重幸、佐々木著、三分一博志、清水泰、杉田輝征、高志俊明、竹内謹治、垂井俊郎、堤敏明、土井一秀、土井良介、土肥晶仁、直井稔征、仲子盛進、中藺哲也、奈波和明、錦織亮雄、西田一好、西田恭則、平田欽也、藤本和男、藤本寿徳、古本竜一、細見恵、堀江淳、前岡智之、前田圭介、三島久範、宮野鼻啓二、宮本剛、元廣清志、森保洋之、山下正司

<山口>

久保紳哉、窪田勝文、栗林隆、田尾繁、田中輝幸、土居郁夫、中村正俊、長野英彦、永見龍一、西村彰和、松寄強司、三村夏彦、村重保則、山下宏、山根満広

<鳥根>

安部喜孝、石倉保富、宇佐美淳、江角彰宣、江角俊則、尾川隆康、小草伸春、龜谷清、白根博紀、櫻石友秋、田原辰男、寺本和雄、西澤邦夫、原浩二、古山篤史、牧戸捷弘、増野元泰、三原貞則、矢田和弘、矢野敏明、山根秀明

<鳥取>

足立収平、井手添正、川中節夫、杵村優一郎、木下正昭、来間直樹、田中博美、塚田隆、樋野朝昭、山下卓治、萬井博行